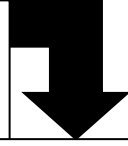


【的中問題！】一部ご紹介致します！

大原：公開模擬試験－第21問

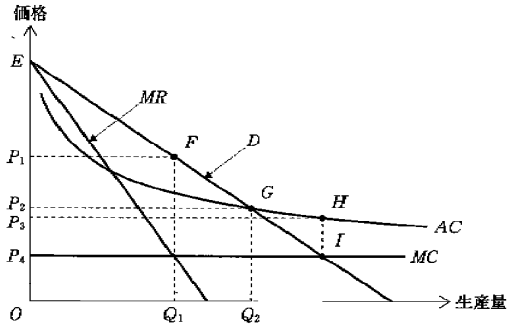
費用逓減産業に関する記述の正誤の組み合わせとして、最も適切なものを下記の解答群から選べ。解答は問22へマークせよ。

- a 費用逓減産業は、相当の生産規模に達するまで限界費用が逓減するような産物であり、その産業の性質が一種の参入障壁となって自然独占が成立する。
- b 費用逓減産業においては、1企業しか市場に存在しないため、政府はその企業に対し、限界費用と限界収入の均等する点で生産を行わせることで最適資源配分を実現させる。
- c 費用逓減産業において、企業に限界費用価格規制を行うと、最適資源配分は実現するが、企業に赤字が生じるため、独立採算を達成させることができず、政府の補助金によって赤字を填補しなければならないという問題が生じる。
- d 費用逓減産業において、企業に平均費用価格規制を行うと、企業に独立採算達成させながら最適資源配分を実現できる。
- e 政府の補助金の問題を回避するために、企業は損失を基本料金によって賄い、使用料金を限界費用に等しく設定する二部料金制度を採用する方法がある。



本試験：第19問

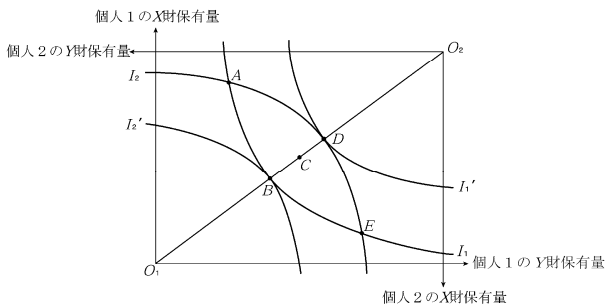
下图は、ある地域で独占的な地位にある電力会社の平均費用  $AC$ 、限界費用  $MC$ 、限界収入  $MR$  および同地域での電力の需要曲線  $D$  を示している。この図から読み取れる記述の正誤の組み合わせとして、最も適切なものを下記の解答群から選べ。



- a 平均費用価格形成原理の下で、この企業の総収入と総費用はともに四角形  $P_2OQ_2C$  で示される。
- b 平均費用価格形成原理の下で、生産者余剰は四角形  $P_1P_3GF$  で示される。
- c 限界費用価格形成原理の下で、消費者余剰は三角形  $EP_1F$  で示される。
- d 限界費用価格形成原理の下で、この企業には四角形  $P_3P_4IH$  に相当する損失が生じる。

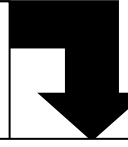
大原：直前対策模擬試験②－第25問

下图は、2人の個人（個人1と個人2）および2財（X財とY財）からなる経済をボックス・ダイアグラムで表したものである。この図に関する記述として最も適切なものを下記の解答群から選べ。なお、曲線  $I_1$ 、 $I_1'$  は個人1の無差別曲線、曲線  $I_2$ 、 $I_2'$  は個人2の無差別曲線、点  $O_1$  と  $O_2$  を結ぶ線は契約曲線である。解答は問25へマークせよ。



〔解答群〕

- ア A点からB点に移動すると、パレート最適が成立し、この移動は社会的厚生を増大させる。
- イ A点からE点に移動すると、個人1の効用は変化しないが、個人2の効用は減少する。
- ウ 契約曲線上の点のうち、B点とD点ではパレート最適が成立するが、C点ではパレート最適は成立しない。
- エ C点においては、個人1のX財とY財の限界代替率が個人2のそれを上回っている。
- オ E点からD点に移動すると、個人1の効用は減少し、個人2の効用は増大する。

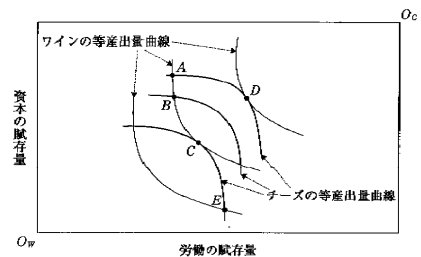


本試験：第15問

ワインとチーズという2財を生産するために、2つの生産要素である資本と労働をどのように配分するかという問題を考える。

縦軸に資本の賦存量、横軸に労働の賦存量をかけた下図では、 $O_W$  がワインを生産するのに両生産要素の投入量がともに0の状態、同様に  $O_C$  がチーズを生産するのに両生産要素の投入量がともに0の状態である。したがって、ボックスの中の任意の点は、これら2財の生産に投入される資本と労働の配分パターンを表している。

ワインとチーズの等産出量曲線がそれぞれ図のように示されているとすると、2財の生産に投入される両生産要素の配分パターンに関する記述の正誤の組み合わせとして、最も適切なものを下記の解答群から選べ。



- a 点Aでは、パレート効率が実現している。
- b 点Dは点Cよりもチーズの生産量が多い。
- c 点Bから点Cへの変化は、生産の効率性を改善する。
- d 点Eでは、2財の生産において資本と労働の技術的限界代替率が等しい。

### ① 経済学・経済政策

#### 【総評】

令和5年度の本試験は、過去22年間の設問数と同じで25問であった。また、前年度は25問中17問が5肢択一であったが、今年度は25問中23問が5肢択一であり、5肢択一の問題の多さが目立った。さらに、前年度は正誤の組み合わせ問題が10問出題されたが、今年度は11問出題されたことも大きな特徴である。難易度については、基本事項をもとに得点できる問題もあるが、5肢択一問題や正誤の組み合わせ問題の多さが、昨年引き続き全体的な難易度を上げている。つまり、前年度より難易度は高くなったと言える。よって、今年の問題は、基本事項に関する問題を確実に正解できたかどうかで得点が左右されると思われる。本科目は、マクロ経済学、ミクロ経済学から出題されており、今年度は解答数ベースで、マクロ経済学14問、ミクロ経済学11問であった。

第1問～第11問がマクロ経済学からの出題問題と考えられる。例年見られる統計資料をもとにした出題が3問あった（近年の出題数よりも1問多い）。基本的な論点に関する問題として、第4問（国民経済計算）、第8問（IS-LM分析）で得点を取りたい。第7問（45度線分析）、第10問・設問2（マンデル＝フレミング・モデル）も正答したいところである。

第12問～第22問がミクロ経済学からの出題問題と考えられる。微分を用いる計算問題などは出題されず、頻出論点を中心に、基本事項やその応用問題が出題された。基本的な論点に関する問題として、第14問（費用曲線）、第19問（費用逡減産業）、第22問（ゲーム理論）で得点を取りたい。第12問（供給曲線）、第13問（上限価格規制）、第17問（外部不経済の内部化）も正答したいところである。第21問（貿易の自由化）は、国際価格が国内価格よりも高いという通常のパターンとは逆のケースであるが、余剰分析ができれば、得点可能な問題である。

以上